

# 宮崎駿『風の谷のナウシカ』論

## ― 中間者ナウシカの行方をめぐって ―

真田 良枝

はじめに

私がテキストとして取り上げたのは、宮崎監督が唯一劇画として描いた作品「風の谷のナウシカ」である。宮崎監督は、映画を完成する以前から、劇画として「風の谷のナウシカ」を描いていたのである。映画作品は単行本全七巻の漫画全体から見ると序盤に当たる2巻目の途中まで連載された時点での作品であり、映画公開後に連載を再開した劇画とは内容が全く異なる。ナウシカは映画の時よりもさらに深く、腐海と人間に関わり、腐海の謎を解く旅を続けていく。

私はナウシカを、人間と腐海、生と死、光と闇などの中間に位置する存在、「中間者」であると考えた。作品当初から描かれる人間と腐海の「中間」ということだけでなく、物語が進むとともに経験する生命の生と死、善と悪など様々な要素に対しても彼女が中間であろうとしたと考える。しかし、彼女が物語の終焉とともに何処へ行ったのかについては、宮崎監督自身も明確な答えを出してはいない。本論文では、彼女がどのような中間に位置しているのかをテキストを基に考察し、ラストで描かれることのない

たナウシカの行方について論じた。

なお、使用するテキストは、宮崎駿『劇画 風の谷のナウシカ』（徳間書店 1983〜1995）とし、第一章以降このテキストを引用する際は、著者名・著書名を省略することとする。

### 【目次】

はじめに	1
「風の谷のナウシカ」のあらすじ	2
目次	3
第一章 主人公「ナウシカ」の考察	5
第一節 中間者としてのナウシカ	6
第一項 ナウシカとは	6
第二項 中間者ナウシカ	6
第二節 「青き衣の者」としてのナウシカ	7
第一項 「青き衣の者」の伝説	7
第二項 「青き衣の者」ナウシカ	8

第二章 ナウシカと各登場人物との関係性の	十
第一節 クシヤナについて	十一
第一項 クシヤナとは	十一
第二項 ナウシカとクシヤナの共通点	十一
第三項 クシヤナとナウシカの理想	十二
第四項 理想の危険性	十三
第五項 死の要素	十四
第二節 巨神兵について	十六
第一項 巨神兵とは	十六
第二項 母親と子として	十七
第三項 中間者と調停者(裁定者)として	十八
第四項 神と救世主として	二十
第三節 王蟲について	二十一
第一項 王蟲とは	二十一
第二項 王蟲の言い伝え	二十二
第四節 墓の主について	二十四
第一項 墓の主とは	二十四
第二項 神と救世主	二十五
第三章 「風の谷のナウシカ」の世界観	二十八
第一節 腐海について	二十九
第一項 腐海とは	二十九
第二項 森の人と蟲使い	二十九
第三項 ナウシカと腐海	三十
第二節 虚無について	三十三
第一項 虚無とは	三十三
第二項 虚無の深淵	三十六

第四章 生命について	三十九
第一節 生と死	四十
第二節 不死の存在	四十一
第三節 清浄と汚濁	四十三
第五章 ナウシカの行方	四十六
第一節 ナウシカの嘘	四十七
第二節 ナウシカの行方	四十八
終わりに	五十一
補注	五十二
資料	五十三
参考文献・引用文献	六十一

(この論文のページは四百字詰め原稿用紙三枚分に相当する)

### 第一章 主人公「ナウシカ」の考察

ナウシカは、「中間者」であることで作品中どの集団にも属さない者として存在することが出来る。しかし、人間側あるいは腐海側の一方にのみ存在する場合、彼女はどの力も得ることはできない。例えば森の人は彼らを崇める蟲使い達がいるからこそ、その能力が神秘として表わされる。同様にナウシカの力も、人間がいて初めて神秘の力となり得るのである。

人間と腐海、両者と関わりを持ちながら、ナウシカは中間者としての力を得ていく。もともと風の谷という腐海と人間がある程度調和した環境で育ったことも、彼女が中間者としての能力を開花させていく要因となっていると考える。しかし、本人には中間

者としての自覚はあまりなかったのではないだろうか。なぜなら、彼女自身には人間と自然の境目がなかったと考えるからである。

それは、彼女が時折見せる迷いから推測することができるだろう。彼女は人間も腐海（王蟲）も同等の存在と考えており、どちらも見捨てることができなない。こういったことから、彼女には境目という概念がなかったと推測できるのである。

そんな彼女は劇画でもアニメ映画でも王蟲の血で染まった真つ青な衣をまとい、伝説上の存在である「青き衣の者」と重なりあっていく。

そもそも「青き衣の者」とは、神聖皇帝の祖である皇祖が土鬼の地に降臨した際、土着の民に広まっていた宗教の予言に現れる使徒のことであった。また

「青き衣の者とは土鬼の土着の宗教が事実をきいて語りついで願望なのか それとも破壊の危機がたかまるとき私たちが種族の生命が時空を隔てて産み出す人々なのか……」

第三巻P29（ユバのセリフ）

というユバのセリフから、前半後半の両者とも自分たちを救う救世主的な存在を求めており、その心が「青き衣の者」を具現化してきたのだと考えることができる。つまり、「青き衣の者」とはこの世界での救世主であり、人々が救われる道を指し示す存在であると考えることができる。

さらに、マニ族の宗教に伝わる予言の後半「失われた大地との絆をむすばん」の部分に着目すると、「青き衣の者（ナウシカ）」が人間と腐海の中間の存在であることが分かる。なぜなら失われた大地とは、人々が失った大地つまり腐海のことであり、腐海と人間の絆を結ぶとは、ナウシカが両者の中間者として両者の絆を築くことであると考えるからである。従って、「青き衣の者」とは救世主であり、中間者であると考えられるのである。

## 第二章 ナウシカと各登場人物との関係性

### 第一節 クシヤナについて

クシヤナとはトルメキア帝国の第四皇女であり、新衛兵の指揮官であった。しかし物語が進むとともに、クシヤナは大海嘯後の世界の混沌を治める王の存在を必要とし、自らが真の王道を歩もうとする。

クシヤナはナウシカに出会ったことで、王道楽土を築くという生き方を見出した。では、クシヤナとの出会いはナウシカを中間者として成長させるきっかけと成り得なかったのだろうか。私はそれについて以下のように考えた。

ナウシカがクシヤナと関わりを持ったことで最も変化したことは、ナウシカが人間を殺めたことである。私は、宮崎があえてナウシカに人殺しの経験させたのは、彼女に死の側面を与え、彼女が単なる偽善者となることを防ごうとしたからだと考える。

なぜなら、彼女が常に生の存在であれば女神のような神的存在となってしまうからである。死の側面を持つことで、彼女は人間らしさを保っていられるのである。もし彼女に人間的要素が不足していたならば、自然と人間の中間者として機能しなくなってしまう。宮崎は、彼女を穢れない神のような存在ではなく、あくまでも人間と自然の中間、救世主として位置づけたかったのだと私は考えた。

## 第二節 巨神兵について

巨神兵とは、ペジテ市の坑道深くに眠っていた旧文明の遺産であり、かつて、火の七日間で世界を焼きつくした程の強大な力を持つた人工生命体である。

ナウシカは巨神兵に「オーマ」という名を与えることで、命を吹き込み(異常誕生)、同時に子と母親の関係を結んだのだと私は考えた。人間と人工生命体であるオーマが親子の関係になった様子は実に奇妙である。さらに、ナウシカの子が人間ではなく(かつて人間が創りあげた)神だということは、ナウシカ自身もただの人間ではなく、聖母マリアや(人間の脇の下から生まれた)釈迦の母親のように大地母神としての要素を得ていることを表していると考ええる。

### 第二項 母親と子として

またナウシカは、オーマを産むことで死の側面と生の側面の両方を得ることができたのではないだろうか。もちろん、人間側のアスベルと腐海側のセルム、どちらかと関係を持っていれば、彼女はいずれ生の喜びを知ることができただろう。しかし中間者である彼女がどちらかと関係を結べば、結んだ方との関係性が強まり、中間者ではいられなくなってしまう。従って、彼女は処女のまま生の側面を得なくてはならなかったのである。

### 第三項 中間者と調停者(裁定者)として

巨神兵(オーマ)は調停者と裁定者。オーマは争いを止めること、裁きを下さすことの両方を兼ね備えていた。ある意味で、オー

マは旧時代の間接者であったと言え、ナウシカと類似している点がある。しかしオーマには、先に述べたように裁定者としての役割がある。つまり、人や出来事を善悪で選別するのである。この点がナウシカとの相違点だと私は考える。ナウシカは中間者であるため、善と悪の中間にも位置していると私は考えるからである。つまり、善と悪両者を受け入れることのできる存在なのである。

しかし、この裁定者としての要素を持つオーマと親子の関係を結んだことで、ナウシカは救世主として最後の力を手に入れることができた。その力とは、過去の遺産(全生命体の浄化計画)を必要のないものとし、過去との関係を断ち切る力であったと推測する。

彼女にこれが出来たのは先にも述べたように、調停者・裁定者であるオーマと深い関わりを持ったことで、オーマの力を得ることができたからだとい私は考えるのである。

### 第四項 神と救世主として

では、もしオーマが存在しなければナウシカはどうなっていただろうか。彼女は変わらず中間者ではあるが、裁定者として墓所の主との関係を断ち切ることは出来なかつただろう。そうなれば、世界は墓の主の思う通りに変えられ、生命を軽んじ、滅びは必然という「虚無」的な考え方で満たされてしまっていただろう。それでは何も変わらないし、何も救えない。表面的な救世主にはなれても、深部では本当の救世主になり得なかつたと私は考える。なぜなら、真の救世主とは今までの歴史の鎖を碎き、人々を真に解放し道を指し示すものであると考えるからである。ナウシカが救いたかったのは、人間でも腐海でもない。星の生命全てだったのである。

そのためには、先にも述べたようにオーマの力が必要不可欠だった。そして、この救世主（ナウシカ）が過去の神（巨神兵オーマ）にナウシカ達の時代の神（墓の主）を葬らせるラストには、「何ものにも捕われず、生命は生きるべきなのだ」という宮崎なりのメッセージであつたと私は考える。そして宮崎は、そのメッセージをナウシカに託したのである。

### 第三節 王蟲について

#### 第一項 王蟲とは

王蟲とは、巨大な十四の眼を持つ甲虫の形態で、攻撃的衝動にかられると普段は深い青色の眼が、ルビーのように赤く染まる。作品の世界観では、王蟲は腐海やあらゆる蟲達の長として君臨する神々しい生物であり、種族全体で共有する高い知能も持っている。ナウシカは物語の進行とともに、王蟲もまた巨神兵と同じく千年以上遡った旧世界のバイオテクノロジーにより、人為的に生まれた生命の一つなのだと理解することになる。

#### 第二項 王蟲の言い伝えについて

古い言い伝えに「王蟲の心をぞくな」とあり、それは王蟲の心のぞくと王蟲の心の闇を通して自身の心の闇に飲み込まれてしまふからであつた。つまり、虚無に喰われてしまい、二度と戻つては来られなくなるのである。ナウシカは王蟲の心をぞき、結果として虚無に飲み込まれてしまった。しかし、セルムに導かれ、ナウシカは闇を受け入れる心、そして腐海の秘密（世界が生まれ変わるうとして）を知る。これによって、虚無に飲み込

まれる以前、つまり闇を恐れ、滅びゆく世界に絶望していた頃から、闇を受け入れ世界に希望を持つナウシカに生まれ変わったのである。

### 第四節 墓の主について

#### 第一項 墓の主とは

土鬼の聖都シユワの墓所の地下に存在する球形の肉塊。「火の七日間」以前の高度な技術や腐海の秘密を守り続けており、夏至と冬至の年二回、一行ずつ表面に古代文字が浮き出てくる。墓の主は浄化された世界と共に消える旧世界の生命のための墓標として、さらに旧世界が滅んだ後の世界を再建するための技術と知識の保管庫としての役割を兼ねていたのである。

#### 第二項 神と救世主

墓の主を創った人々の世界は、憎悪と絶望の混沌とした世界であつた。だからこそ、彼等は清浄を求め浄化の神（墓の主）を創つたのだらう。しかし、それは人の汚濁を否定する行為であり、生きることを否定する考え方だつた。いくら清浄の地に生れ変わっても悲しみや憎しみは消えない。なぜならそれらも人間の一部分だからであり、だからこそ苦界の中にあつても人は喜びを見出すことができるのである。ナウシカがそれに気づくことが出来たのは、彼女が今まで中間者として人間と腐海、生と死、光と闇の間で悩み苦しんできたからである。

こうした経緯を得たナウシカ（救世主）が、世界の秘密の中心である墓の主（神）の元へたどり着き、真実を見極めようとする

のは必然だっただろう。また墓所との対峙は、ナウシカが道を指し示す者としての最も重要な事柄であった。なぜなら、ナウシカは見守る者、墓所は神であり、生命を自分の思うままに動かしていく者で両者は全く相容れない関係にあるからである。またナウシカは全ての生命に人格があり、それら全てが汚濁と清浄から出来ていると考えている。従って、墓の主のように自分が神として生命を導いていかななくてはならないという考え方は、生命を冒した行為以外の何ものでもないのである。だからナウシカは、救世主として、神を滅さなくてはならなかったのだと、私は考えるのである。

### 第三章 『風の谷のナウシカ』世界観の考察

#### 第一節 腐海について

##### 第一項 腐海とは

腐海には、王蟲やその他多くの蟲たちが生息している。また作品中では、人々を脅かす腐海の植物群は、太古の文明によって汚染された大地を浄化させるために生まれた存在であることが判明する。さらに劇画では、腐海は太古の科学文明によって人工的に作り出された森であり、世界の浄化という役目を担った生態系であった。

##### 第三項 ナウシカと腐海

ナウシカが腐海を通じて、世界の構造、秘密、真実を見出し、いくことが出来たのは、やはり彼女が人間の世界と腐海の世界の

中間に存在していたからだろう。なぜなら、彼女には中間者として人間と腐海を結び付け、両者が共存して生きられる道を指し示す役目があったからである。人間の世界と腐海の世界の両方を平等に理解できなければ、彼女がこの役目を勤めることは不可能だ。だからこそ彼女は、腐海の謎、そして人間と腐海の両者が生きる世界の真実を見極める必要があったのである。

つまりナウシカは、世界を清浄と汚濁に区別しては、本当の世界は見えてこないと考えていたのだ。なぜなら生命は自らその身体の仕組みを変え、汚濁(毒)と清浄のバランスの中で生きられるようにしてしまっただからだ。清浄と汚濁、そのどちらがかけても生きてはいけなにも関わらず、人間達は自分たちの世界が清浄の地で腐海こそが汚濁の根源であると思いついてきた。ナウシカは中間者であったが故に、汚濁と清浄とに分けて考えずに世界を見つめることが出来たのだと私は考えるのである。

##### 第二節 虚無について

虚無とは「無」であり、「絶対的な死」そのものであり、生命の闇の部分とも考えられる。それは、生命が生きるために必要な本質、源を奪う存在である。

虚無をこう考えた私は、次に王蟲の心である「虚無の深淵」について、次のように考察した。すなわち、「死」や「闇」を見つめ、それすらも包み込むことが「虚無の深淵」であると考えたのである。私がこう考えるきっかけを与えてくれたのは、テキスト第七巻で、ナウシカが墓の主と対峙した際に述べた言葉であった。

「王蟲のいたわりと友愛は虚無の深淵から生まれた」

第七巻P201 (ナウシカのセリフ)

虚無とは先ほど述べたように、「死」「消滅」など負の要素の多い言葉だったにも関わらず、ナウシカが虚無の深淵からいたわりと友愛が生まれると言った根拠とは何だったのだろうか。

それはやはり、王蟲の心を覗いた時の体験からきていと考えられる。ナウシカは王蟲の心をのぞき、闇（虚無）に飲み込まれそうになる。さらにナウシカの傍には、肉体を失い精神だけの存在となった神聖皇弟がいた。間一髪で、ナウシカは神聖皇弟を振りほどくことが出来たが、神聖皇弟が闇に飲まれそうになると今度は逆に助けるのだった。

この時ナウシカは、自分の闇を受け入れるだけでなく、他者の闇も受け入れることが出来るようになったのである。それが出来たのは虚無の深淵で、自身の闇の部分を見つめることが出来たからであろう。自分にも闇があり、他者にも闇があるから、光（いたわりや友愛）を見たときそれがどんなに尊いものか分かるのだと私は考えるのである。また、自身の死や他者の死を受け入れられるからこそ、生命の素晴らしさに感動するのではないだろうか。生きることが私たちの一部なら、死ぬことも私たちの一部。己の死を恐れず、死から逃げることもなく、今ある命を尊ぶ心。それは、自分の生命だけでなく他者の命に対しても大切なことであり、その心があるからこそ、人をいたわり、愛する心が生まれるのだと私は考える。

## 第四章 生命について

### 第三節 清浄と汚濁

「風の谷のナウシカ」の重要な要素として挙げられる清浄と汚

濁。それは、世界の清浄と汚濁という意味と、この節で述べる生命の心や本質の清浄と汚濁という意味もある。

喜びやかかやき（清浄）と苦しみや悲劇、おろかさ（汚濁）が同時に存在しているから、苦しみにあつた時でも、人の優しさや思いやりを信じて生きることができし、それを当り前と思わず大切にすることが出来る。どちらか一方が欠けても生命は生命として存在することができないのだ。なぜなら、汚濁があるから生命は清浄を求め、変わろうとするからである。

このようにナウシカは、様々な生命の生死に関わり、また生命が汚濁と清浄の相反する要素を本質として持っていることを理解したのである。生と死、清浄と汚濁、どちらも生命が変化し続けるためには必要である。ナウシカがこのように両者の必要性に気が付いたのも、彼女が中間者として様々な生命の生死に真剣に関わり、生・死、清浄・汚濁とは何のかを見極めてきたからである。

## 第五章 ナウシカの行方

### 第一節 ナウシカの嘘

生命は汚染された地で生きられるように自らの身体を作り変えていた。従って毒のない清浄の地では生きることが出来ず、それほどばかりか肺から血を噴き出して死んでしまう。ナウシカはこの事実を知りながら、人々に嘘をつき続けようと決めたのである。彼女はなぜこのような嘘をついたのか。その理由は大きく分けて三点ある。

一点目、ナウシカには腐海の真相が分かっているが、それを人々に言葉で説明するのは困難だからである。腐海の真相をナウシカが理解出来たのは、彼女が中間者として、全てを見届けてきたか

らである。また、世界の秘密を知り、世界の重みを背負うには、強靱な精神力が必要である。ナウシカはその力を長い旅の中で培ってきており、それはナウシカにしか出来ないことだった。なぜなら、ナウシカは平等に物事を見つめることができるからである。しかし他の者は違う。ナウシカのように、人間と腐海、光と闇、生と死の間という視点から真実を見つめることが出来ない。従って、ナウシカが今まで経験してきた真相を説明したとしても、理解されないのである。

二つ目は、ナウシカはこれから人々が経験する喜び、苦しみ、悲しみ全てを見届ける覚悟をしたからである。墓の主を倒しても、問題が解決したわけではない。人類が争いを二度としないかというところで決してない。苦しみや悲しみが無くなるわけでもない。全てはこれからなのである。ナウシカはこれから起こる全ての出来事を星の生命と共有し、見守る覚悟をしたのである。

三つ目に、ナウシカは将来への期待ではなく、大切な人達と共に生き、その人達と苦しみや喜びを分かちあって生きていくという意味の「希望」、「生きる意志」を与えたかったのである。彼女は旅の中で、生命のけなげさ、力強さを知ることが出来た。苦しみから喜びを見いだせる生命ならば、死の淵であっても生きることをやめることはない。ナウシカはそう信じているのだと私は考えるのである。

## 第二節 ナウシカの行方

今までの章を踏まえた上で、私はナウシカの行方について人間の世界にとどまり、世界を見つめ続ける中間者になったと考える。その理由は二つある。

一つは、ナウシカの魅力について宮崎が次のように述べている

からである。

「ぼくは、自然を愛しながら、なおかつ人間の世界にとどまっている魅力のある人物を描きたいと思っただけです。」

宮崎駿 『劇画 風の谷のナウシカ』 徳間書店 1983  
3-1995 P473

二つ目は、宮崎がナウシカを中間者であり続けさせるためにセルムやアスベルと関係を持たせなかったためである。また、彼女が仮に森の人のもとへ去ったとするならば、彼女は中間者としての力を失ってしまう。人間にとつて畏怖の対象である蟲と心を通わず彼女を見て、人々は彼女にも畏怖の念を持つ。そして、彼女の腐海に関わる姿を見ることが人々は腐海へ意識を向けることが出来、腐海との関わりを深めようとするのである。さらに、人間と腐海の間ということだけでなく、心の光と闇、生と死についても見つけ直すきっかけをもナウシカは与えることが出来るのである。これらすべてが中間者ナウシカの持つ能力なのである。つまり、彼女が本当に森の人のもとへ去ってしまったとしたら、ナウシカは腐海との関係が深まってしまい、中間者として存在することが出来ず、その能力さえ失ってしまうのである。

つまり、彼女が人間の世界にとどまったのは、彼女の魅力を失わないため、そしてナウシカが中間者であり続けたためだったと考えるのである。しかし、彼女は一つの所にとどまる事は無かっただろう。なぜなら、彼女は中間者として、全ての事柄を見守り、見届ける役目があるからである。一か所にとどまっていたら、視野が狭く、常に変わりゆく生命を見つめることが出来ない。だからこそ、様々な場所へ向かい、様々な出来事を経験して生きていく必要があったと考えるのである。

## 終わりに

宮崎がナウシカの行方を明確に示さなかった理由、それは彼自身もナウシカがどこへ行ったのか分からなかったからだと思う。宮崎は、物語の終盤に至った時「言葉がなくなった」と話していた。この時、すでにナウシカは宮崎の手を離れていたのではないだろうか。つまり、ナウシカが宮崎に導かれていたのではなく、宮崎がナウシカに導かれていたと思うのである。物語が終わった時、ナウシカは宮崎のもとから、まだ見ぬ新たな場所へ歩み始めたのである。

卒業論文に取り組んでいる間、私はずっと、ナウシカの後ろ姿ばかり追っていたような気がする。彼女の顔は映画でもテキストの中でも見ているのに、何故か遠くを歩いているように感じていたのだ。青い衣をまとい、一人で金色の野を歩むナウシカ。最終章で彼女の行方を考察し終えた時、私は少しだけ彼女の素顔を見ることが出来たように感じた。

最後になりましたが、自分の考えに自信が持てず、いつも立ち止まってばかりいた私の背中を押してくれた研究室の仲間たち、そして、テーマがなかなか決まらずに、九月から本格的に卒論に着手したにも関わらず、真剣に指導してくださった担当教官の中村先生に厚く御礼を申し上げます。